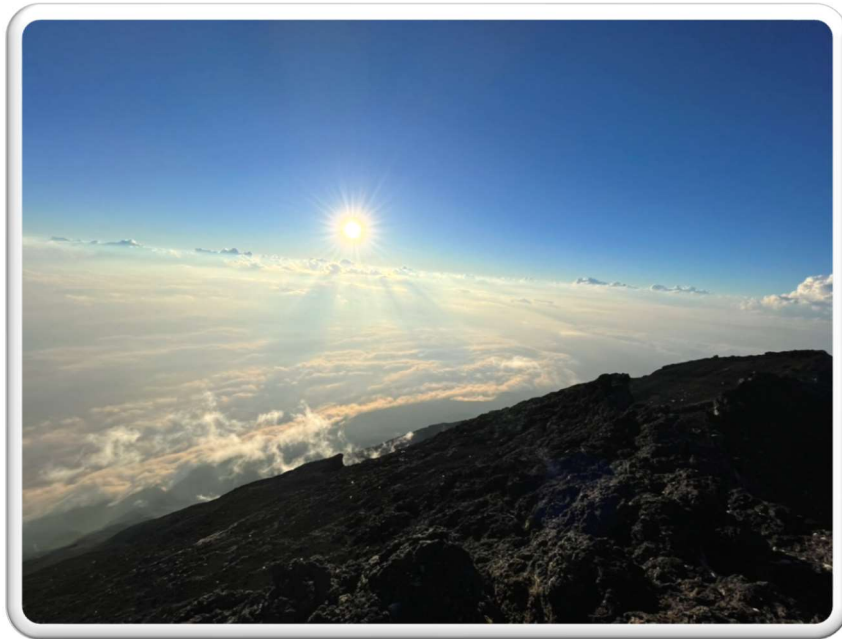


令和5年10月

令和5年夏期における山岳遭難の概況
(令和5年7月～8月)



静岡県警察本部
地域部地域課

1 静岡県における夏期（7月1日～8月31日）の山岳遭難発生状況

(1) 統計資料等

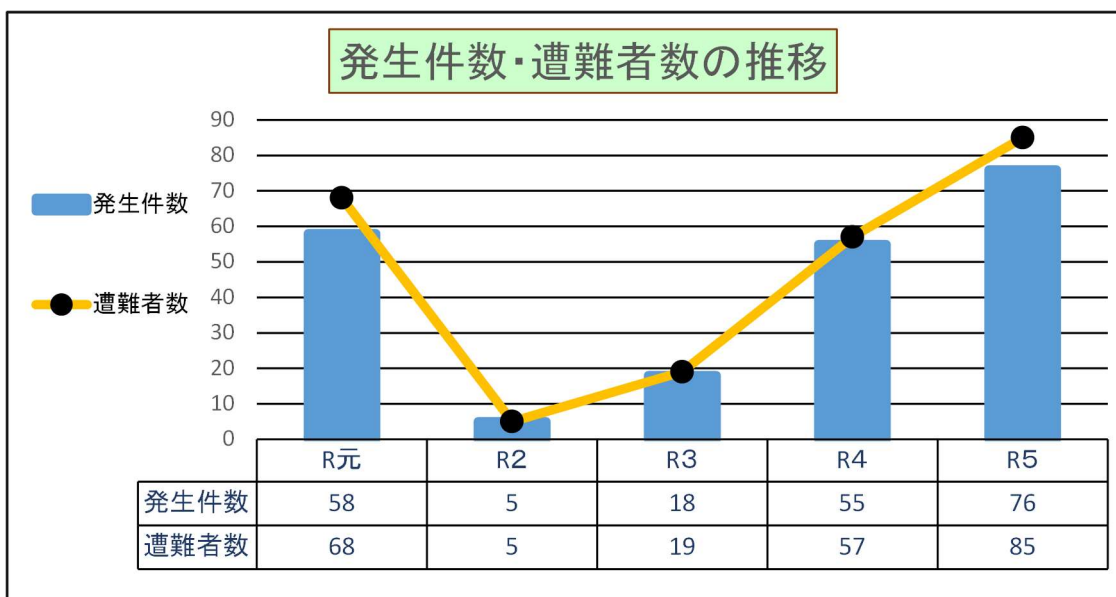
ア 発生件数等

区分	発生件数 (件)	(人)	遭 難 者 数					
			死亡	行方不明	負 傷		無事救出	
					重傷	軽傷		
県下全体	76 (+21)	85 (+28)	1 (±0)	1 (+1)	9 (+3)	16 (+11)	58 (+13)	
内 訳	富士山	61 (+14)	64 (+16)	1 (+1)	0 (±0)	5 (+1)	14 (+10)	44 (+4)
	南アルプス	7 (+2)	7 (+2)	0 (-1)	0 (±0)	2 (±0)	1 (±0)	4 (+3)
	その他	8 (+5)	14 (+10)	0 (±0)	1 (+1)	2 (+2)	1 (+1)	10 (+6)

※ 括弧内は前年同期比

イ 過去5年の発生状況

区分	発生件数 (件)	(人)	遭 難 者 数				
			死亡	行方不明	負 傷		無事救出
					重傷	軽傷	
令和元年	58	68	1	0	17	9	41
令和2年	5	5	1	0	0	1	3
令和3年	18	19	1	0	0	6	12
令和4年	55	57	1	0	6	5	45
令和5年	76	85	1	1	9	16	58



ウ 山系別発生状況

区分	発生件数 (件)	(人)	遭 難 者 数				
			死亡	行方 不明	負 傷		無事 救出
					重傷	軽傷	
合 計	76	85	1	1	9	16	58
富 士 山	61	64	1		5	14	44
南アルプス	7	7			2	1	4
そ の 他	8	14		1	2	1	10
安倍山系	1	1		1			
天城山系							
愛鷹山系	2	2			1		1
天子山系	3	9					9
北遠山系	1	1			1		
奥大井山系							
そ の 他	1	1				1	

エ 態様別発生状況

区 分	発生 件数 (件)	(人)	遭 難 者 数					山 系 別 (人)		
			死亡	行方不明	負 傷		無事救出	富士山	南アルプス	その他
					重傷	軽傷				
合 計	76	85	1	1	9	16	58	64	7	14
病 気	26	26	1	0	0	0	25	24	2	0
転 倒	22	22	0	0	6	16	0	19	2	1
疲 労	13	13	0	0	0	0	13	11	2	0
道 迷 い	6	9	0	0	0	0	9	6	0	3
滑 落	3	3	0	0	2	0	1	1	1	1
そ の 他	6	12	0	1	1	0	10	3	0	9

オ 年齢層別発生状況

区分	(人)	遭 難 者 数					山 系 別 (人)		
		死亡	行方不明	負 傷		無事救出	富士山	南アルプス	その他
				重傷	軽傷				
合 計	85	1	1	9	16	58	64	7	14
10 歳 未 満	2					2	2		
10 ～ 19	2					2	2		
20 ～ 29	18			1	3	14	17		1
30 ～ 39	7					7	5		2
40 ～ 49	11			1	4	6	7	1	3
50 ～ 59	14			4	3	7	8	3	3
60 ～ 69	16	1		3	2	10	11	2	3
70 ～ 79	9				3	6	7	1	1
80 歳 以 上	6		1		1	4	5		1

カ 居住地別発生状況

区分	(人)	遭 難 者 数					山 系 別 (人)		
		死亡	行方不明	負 傷		無事救出	富士山	南アルプス	その他
				重傷	軽傷				
合 計	85	1	1	9	16	58	64	7	14
静 岡 県	12	0	1	3	1	7	6	1	5
県外居住	63	1	0	4	13	45	48	6	9
国外居住	10	0	0	2	2	6	10	0	0

(2) 特徴

- 今夏は富士山は世界遺産登録 10 年という節目の年であったことに加え、行動制限がなく、富士山山小屋の宿泊客数の制限緩和、南アルプスの山小屋が通常営業となったことから、登山者増加に伴い山岳遭難が増加したと考えられる。
- コロナ禍前の令和元年同期と比べても発生件数・遭難者数は増加
- 場所別では、富士山が全体の約 8 割
- 態様別では、病気、転倒、疲労で全体の約 7 割
- 年齢別では、60 歳以上が全体の約 4 割

2 山岳遭難の防止対策

(1) 登山計画の作成と万全な装備品の準備

気象条件、経験、体力、技術等に見合った山を選択し、登山日程、携行する装備品、食料等に配慮し、安全な登山計画を立てる。

登山計画を立てるときは、滑落等の危険箇所や、トラブル発生時に途中から下山できるルート（エスケープルート）等を事前に把握する。

また、登山予定の山の気候に合った服装や登山靴、雨具（レインウェア）、落石や滑・転落時に頭部を守るためのヘルメット、地図、コンパス、行動食等登山に必要な装備品や、万一遭難した場合に備え、助けを呼ぶための連絡用通信機器（携帯電話、無線機等や予備バッテリー）やツェルト（簡易テント）、非常食等を準備するなど、装備を万全に整える。

なお、単独登山は、トラブル発生時の対処がグループ登山に比べて困難になることが多いことを念頭に、信頼できるリーダーを中心とした複数人による登山に努める。

(2) 登山計画書・登山届の提出

登山計画書・登山届は、家族や職場等と共有しておくことにより、万一の場合の素早い捜索救助の手掛かりとなるほか、計画に不備がないか事前に確認するものであることを意識付け、作成した登山計画書は、一緒に登山する仲間と共有すると共に、家族や職場、インターネットなどを通じて事前に警察等に提出しておく。

(3) 道迷い防止

地図の見方やコンパスの活用方法を習得し、登山には地図やコンパス等を携行して、常に自分の位置を確認・把握するよう心掛ける。

なお、GPS機器や携帯電話のアプリ等位置情報を取得することができる機器を活用することで、より正確な位置を把握することができるため、道迷いの防止や、遭難発生時の迅速な場所特定につながる。

(4) 滑落・転落防止

日頃から手入れされた登山靴やピッケル、アイゼン、ストック等の装備を登山の状況に応じた的確に使いこなすとともに、気を緩めることなく常に慎重な行動を心掛ける。

また、滑落・転落する恐れがある場所を通過するときは、滑落・転落や上方からの落石に備え、必ずヘルメットを着用する。

(5) 的確な状況判断

霧（ガス）や悪天候による視界不良や体調不良時等には、道に迷ったり、滑落等の危険が高まることから、「道に迷ったかも。」と思ったら、闇雲に

進むことなく、今歩いてきた道（トレース）を辿り、正規の登山道まで引き返すなど、状況を的確に判断するとともに、早めに登山を中止するよう努める。